# 遺族の心を労る調香セット
## A set of incenses to comfort the bereaved

齋藤 由佳
指導教員 李盛姫

サレジオ工業高等専門学校 デザイン学科 ビジュアルコミュニケーション研究室
キーワード：遺族，調香，源氏香，前向き

１． 研究背景・目的

筆者の母親は看護師で、職業柄たくさんの死や別れを間近で見ているが、新型コロナウイルスが流行ってからストレスをこれまで以上に抱えるようになった。感染症予防のために、新型コロナ死者はすぐに火葬場に送られてしまい、別れを惜しむ時間もない。母はそのような遺族を見ても忙しくて慰めることができない。筆者はそのような現状から死について考え、十分にお別れができなかった遺族に向けて亡くなった方をいつでもほのかに思い出すことを研究目的とし、ツールを提案する。

２．調査内容

母に聞き込み調査を行った。通常は患者が亡くなる前に家族に連絡し、別れを惜しむ時間を作る。しかし、新型コロナが始まってからは患者の家族や医療従事者を守るためにコロナ患者は隔離される。そして誰にも会えないまま亡くなると、別れを惜しむ間も無く遺体は火葬場に送られてしまう。感染予防対策で仕方ないとはいえ、遺族は通常よりも深く悲しみ、立ち直れない人も多い。また、患者を最期まで看病する医療従事者は、家族にも会えなくて悲しむ患者や、臨終に立ち会えなくて悲しむ遺族を見て悲しい気持ちになり、もっとできることがあるのではないかと思うことがあると言う。　私は祖父を亡くしたとき、コロナ禍ではなかったため臨終にも立ち会えたし、そこで感謝を伝えたり、思い出話をしたり、悲しかったが最後に祖父と話すことができて嬉しかった。今でも当時を思い出すし、祖父との思い出は筆者を前向きにしてくれる。

2-1．死について

死に関する研究テーマを掘り下げるため、本校の校長先生であり神父様でもある小島神父に話を聞き、死の哲学や死に近い人が余生を過ごすホスピスで働くシスターの死生観について綴った書籍を勧めてもらった。カトリック教では、死を悲しいものと捉えておらず、「死者の日」というミサによって亡くなった方を思い出す日がある。仏教でいう法事とは違い、死者のためではなく、亡くなった方を思い出して心を落ち着ける遺族のための日である。その考えを取り入れ、遺族が亡くなった人のことを思い出して前向きに生きていけるようなものを考えたいと思った。

2-2．調香について

日本の香道について興味を持った。平安時代に風雅として親しまれ、平安貴族は自ら独自の香りを調合した。その中でも代表的な組香は、何種類かの細かく刻んだ香木を混ぜて焚き、どういう香りが使われているのかを当てる遊びである。数種類の香をそれぞれ組み合わせて焚き、香りで主題を表現し、趣向を味わう。

2-3.　源氏香の組香の手順

1. 5種類の香木をそれぞれ5包ずつ（計 25 包）用意する　2. 24包を混ぜ合わせて任意の5包を引く　3. 引き去った5包を順に炊き出す　4. 香の出によって香図を書いて完成させる　5. 照らし合わせる（香図は53通りある）　6. その図形

が表わす源氏物語の巻名が答えとなる　7. 香記には答えとなった巻名にちなんだ和歌を 1 種書き記すことがある

図 1　源氏香の図

源氏香によると、香りはその人を印象付け、その香りを嗅ぐとふんわりその人を思い出すことができる。本研究では日本の伝統文化である組香の要素を入れて、亡くなった人の遺族や友人がその人の香りを思い出し、調香する。そして思い出しながら時を過ごせるような提案をする。

３．コンセプト

「前向きに生きる」をコンセプトにした調香キットを提案する。コロナで人を失う悲しみは通常より大きいため、遺族や友人が気に病むことはなく思い出を語り、個人のイメージの香りを作るキットを提案する。そうすることで、故人を忘れることなく自分の人生を前向きに生きることができると考察する。

４．アイディア展開

粉末タイプの調香キットと液体タイプの調香キットを考案する。調香キットは紙製の箱の中に入っており、蓋の裏に故人の写真や名前、メッセージを残せるカードがある。源氏香を引用し、調合の仕方を記したガイドブックを同封する。粉末タイプのキットは本格的であるが、道具は簡易的な香道のやり方に合わせて調香することができ,線香のように焚いて香りを楽しめる。液体タイプは香水などの調香に近く、誰でも気軽に調香することができる。火を使わないので子どもでも安心して使うことが出来る。このキットを使っていつでも故人との思い出に浸ることが出来る。コロナで悲しむ人や、コロナ禍が終わったとしても大切な人を亡くした人に使ってほしい。

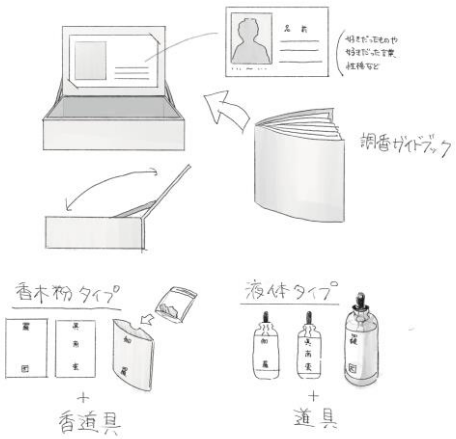


図 2　アイディアスケッチ

4-1. 粉末タイプの提案物：6 種の香木（伽羅・羅國・眞南蛮・眞那賀・佐曽羅・寸門多羅），香道具

4-2. 液体タイプの提案物：6 種類のフレーバーの香料（伽羅・羅國・眞南蛮・眞那賀・佐曽羅・寸門多羅)、道具

５．今後の展開

試作を制作し、実際に使用してみる。また、パッケージデザインやガイドブックのデザインを行う。

参考文献

[1] アルフォンス・デーケン,『より良き死のために』, ダイヤモンド社, 2018

[2] 文化遺産オンライン『源氏香図』https://bunka.nii.ac.jp/index.php (2021.10.9)